

『神の婚礼』再考にむけての一試論

MATSUSHIMA, Eiko / 松島, 英子

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

9

(開始ページ / Start Page)

429

(終了ページ / End Page)

438

(発行年 / Year)

2012-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007824>

『神の婚礼』再考にむけての一試論

松島 英子

はじめに

古代世界における『神の婚礼』問題は、歴史、宗教史、文化人類学その他様々な分野において、つねに大きな関心をもって扱われ、これについての議論が幾度となく繰り返されてきた。かなり以前になるが、私自身がメソポタミアのアカド語文献から資料を採し出し、論を組み立て発表していた時期がある。それなりにアッシリア学関係者の間で、刺激的に受け止められたと思う。だがその後自身の研究テーマを別の方面に移していたため、しばらくは議論の外に身を置いていた。ところが最近になって、新たに発表された研究成果に刺激されたことが契機になり、再びこの問題が気にかかるようになった⁽¹⁾。その流れの中で寄稿したのが、小論「メソポタミアにおける『神の婚礼』問題の展望について」（篠田知和基編『神話・象徴・言語 III』楽郷書院（2010）pp.121-132）である。

メソポタミアにおける『神の婚礼』問題については、数十年に及ぶ長い議論の歴史がある。この題材はときに『聖婚』（Sacred Marriage）と呼ばれ、かなりの期間にわたってこちらの用語が常用されていた。私もかつては使った表現であるが、ある時期から抵抗感を持ち始めた。その理由は先の小論でおおむね述べた心算である。しかし後になってさらに気付いたことがあり、本稿であらためて問題を整理してみたい。つまり、本稿は上記の小論の「見直し・補記」の位置づけとなる。しかしこのような作業を続けることが、この困難だが魅力的な論題について、確かで発展性のある展望を見出すための、唯一の方策では

なかるうか。

Ⅰ『神の婚礼』または『聖婚』問題概観

先の小論で論じたのは、まずは古代メソポタミアにおいて、しばしば『聖婚』と呼ばれる宗教現象がみられることである。舞台はいくつかの有力都市の主神殿であり、ここで男女の神の「結婚」を想定した儀式が、何らかの形で執り行われた。どのような実現形態であったのか、どのような機会に行われたのかについては議論がある。さらにその意味については、延々と議論が重ねられてきた。上述のように私自身はある時期からこれらを『聖婚』と呼ぶことを避け、『神の婚礼』と呼んできた。その理由と関わる諸議論については先の小論で述べたし、のちにも説明することになろう。とりあえずはこの宗教現象の概要を述べると、次のようになる。

『神の婚礼』には明らかに二つのタイプがある。ひとつは前三千年紀末から二千年紀初旬に書かれたシュメール語資料が伝える事象であり、もうひとつは、前一千一年紀のアッシリア・バビロニア系資料が語る宗教儀礼である。この二つのグループの間に何らかのつながりがあるのか、あるいは別個の現象として区別するのが妥当なのか、それこそがこれまで様々な論争を呼び、しかも現在なお出口が見えない厄介な大問題である。私としては、解決の手掛かりとなりうるポイントを若干ながらつかみ、提示できたと考えている。

繰り返しは避けたいが、今回の論を進展させるために、あえて次の事柄だけは確認したい。『神の婚礼』問題は二つのカテゴリーに分かれていると述べたが、それは関係する文献資料の言語・時代・内容いずれの面からも明瞭なのである。第一のカテゴリーが、前二千年紀初頭までのシュメール語資料が伝える「イナンナ女神の愛と結婚」に関係するものであり、第二のカテゴリーが、前一千一年紀のアッシリア・バビロニアの神殿で営まれた有力神の婚礼に関する直接または間接の言及が物語る事柄である。宗教儀礼の性格そのものも、第一と第二のカテゴリーの間には差異がある。

ところで後者の場合、婚礼は想定上の宗教儀式であり、当該の神（男女のカップル）の像を特別の祭室に置いたり、そこから移動させたりしつつ、これを神の行為とみなして式を進行させたものである。そのことは資料の分析から明ら

かである。つまりは一種の「人形劇」の形をとった宗教儀礼なのである。また劇の「シナリオ」がつくられ、儀式の当事者である神のカップルの間で交わされる想定上の台詞やナレーションが、テキストにまとめられたことも明らかである。少なくともシナリオに該当する作品が一点は現存している。前一千年紀の神の婚礼式は、神像と台詞・音楽による総合的な宗教劇であった。これまでも何度か述べたが、われわれの目に「人形劇」と映るこの宗教劇は、バビロニア人・アッシリア人にとっては、本当の神々が実際に行っている儀式的行為であった。当時の人々は、神像が神そのものであると固く信じ疑わなかった⁽²⁾。神像を神と同一視するのは、何も古代メソポタミアに限った現象ではないが。

II バビロニア・アッシリアにおける「神の婚礼式」

そもそも私がこの問題に関わるようになったのは、上記の第二のカテゴリー、すなわち前一千年紀のアッシリア・バビロニアの神殿で営まれた有力神の婚礼に関する直接または間接の言及例を、アッカド語文字資料から拾い出す作業を行ったことに始まる。これまでは、前一千年紀の事例について論じる場合でも時間の流れに沿い、第一のカテゴリーの事例紹介を先に行ったのちに第二のカテゴリーに言及してきた。しかし最近になって、この論述の方式が問題の筋道を見えにくくしているのではないかと考え始めた。それゆえ、通常とは順序を入れ替え、まずはアッカド語文献が物語る「神の婚礼式」の事例に言及することから始めたい。本稿では第一のカテゴリーと第二のカテゴリーの差異を論旨の主要な部分に位置付けるため、前一千年紀の事例についてそれぞれを紹介する作業は避けられないが、既発表の論文との重複を避けるため、ごく簡単な概要を以下に記述するのみにとどめる⁽³⁾。

1. 前二千年紀の事例

前二千年紀の事例を物語る、または暗示するテキストは少なく、しかも宗教儀礼との関わりが明らかでない場合もある。まず挙げられるのは、「ナナヤ女神とムアティとの相聞歌」である⁽⁴⁾。ナナヤはウルクの女神で、同じウルクの大女神イナンナ/イシュタルと同様「愛」（性愛）のパトロンであり、性格が一部重なりあうところがある。テキストには愛する若い男神ムアティとの愛

の営みを通して、女神がバビロン王アビ・エシュフ（前 1711－1684）を祝福すると語られている。このほかに時代が下った中期アッシリアの成立になる「恋愛歌カタログ」*KAR 158* を挙げることができよう。当時流布していた恋愛歌の題名⁽⁵⁾を多数収集したカタログだが、現存するのはこのカタログ形式のテキストのみで、宗教的な文脈とどう絡み合うのか、全く不明である。

ほかに、エマル（現シリア）の神殿における「嵐の神」と女神官の「結婚式」を物語るテキストが一点知られている。前 14 世紀に位置づけられ、儀礼の過程を説明しているのだが、その詳細は鮮明ではない。西セム系の文化が背景にあり、いささか異色である。

このように前二千年紀については、あまりに資料が少ない。資料が発見されていないからなのか、それとも伝統そのものが希薄であったのか、確かめる術はない。ある程度具体的な情報をもたらしてくれるのは、前 18－17 世紀の「ナナヤ女神とムアティとの相聞歌」一点のみである。これにはウルクの伝統とのつながりが推測される。

2. 前一千年紀の事例

前 7 世紀になると、アッカド語で書かれた資料の中に、かなり具体的な記述が出てくる。以下に概略を列挙する。

- 1) ナブーとタシュメートゥの婚礼式：少なくとも 3－4 点の手紙文と一点の詩的作品が確実な資料として残る。これらから前 7 世紀中～後半に、アッシリアの都の一つカルフのナブー神殿において、アヤル月⁽⁶⁾に、主神とその妻の「婚礼」が举行されたことがわかる。実際の儀式は神像によって行われた。
- 2) ナブーとナナヤの婚礼式：バビロニア系の歴編テキストに、アヤル月に行われたナブーの婚礼式の記述がある。相手は天の神アヌの娘であるナナヤである。
- 3) バビロンの主神マルドゥクと妻ザルパニートゥの婚礼式：前 7 世紀の事例がアッシリアの王碑文の中の断片的言及から判明する。
- 4) アンとアントゥの婚礼式：ウルクから出土した典礼テキストのなかに、一千年紀後半から末に行われていた大がかりな儀式のなかに、主神アヌ

とその妻アントゥの婚礼が含まれていたことを物語る記述がある。

- 5) シッパルの主神シャマシュと妻アヤの婚礼式：前6世紀以降の王碑文や経済文書を繋ぎ合わせることで立証できる。

以上に共通して言えるのは、主として前一千年紀のアッカド語資料に見る「神の婚礼」は、有力都市の主神あるいはパンテオンで高位を占める神と、その「正妻」との婚儀だということである。

また、国の王が儀礼に直接・間接を問わず大きくかかわっていたことも共通している。婚儀のための家具調度・衣装その他を寄進したり、式次第について高官に報告させたり、祭りのために犠牲をささげまた宴席を設け人々を招待したりしている。2.1) 2.2) の場合は顕著だが、その他の場合でも王が当該の神々へ恩寵を懇願する様子などがみられる。これは1.にも共通する。

III シュメール世界の「宗教恋愛劇」

ここでもう一つのカテゴリーである、前三千年紀末から二千年紀初旬のシュメール語資料が伝える「イナンナ女神の愛と結婚」について考えてみよう。

周知のように前三千年紀末から二千年紀初旬に成立したシュメール語文学作品の中には、ウルクの有力女神イナンナとその「愛人/夫」を巡る相当数の詩的作品が含まれている。これらはその文学的価値を評価され、以前から多くの研究者の関心を惹き付けてきた。詩歌が物語る「イナンナの結婚」を巡って、あまたの議論が重ねられてきた。その概要紹介と、私なりの見解表明は、冒頭に挙げた小論「メソポタミアにおける『神の婚礼』問題の展望について」のなかで、紙幅を割いて行った。ここではそれ以降、私が気付いた、あるいは気にし始めたことを、述べてみたい。

S.N. クレイマーが1969年にその著名な書物『聖婚』⁽⁷⁾を発表して「イナンナ女神の愛と結婚」を巡るテキストをまとめて提示して以来、関連する文献が単発的に発表されたことはあったが、それらを再び総合的に検討しまとめたのは、Y. Sefati, *Love Songs in Sumerian Literature, Critical Edition of the Dumuzi-Inanna Songs*, Bar Ilan Studies in Near Eastern Language and Culture, Jerusalem, 1998. である。その後数年たって、P. Lapinkivi,

The Sumerian Sacred Marriage in the Light of Comparative Evidence, が発表された⁽⁸⁾。この間、オックスフォード大学から翻字・翻訳されたシュメール文学テキストをデジタル資料として発信するプロジェクトが始まり (The Electric Text Corpus of Sumerian Literature)、多くのシュメール語テキストに容易にアクセスできるようになった。

こうして「イナンナ女神の愛と結婚」を巡る資料を総括的に眺め、概要を見比べることが可能になると、あらためて気付くことがある。以下の点である。

- 1) シュメールの「イナンナ女神の愛と結婚」関係テキストは、イナンナとその「愛人」との間の恋愛歌または「愛の儀式」の叙述である。これらは、ウル第三王朝時代から古巴ビロニア時代初期、すなわちおよそ前 2100－1800 年の約 300 年間に成立した。
- 2) 一部のテキストでは、イナンナは燃えるような恋愛感情を抱く若い娘の姿を見せる。これらは古いシュメールの民間伝承や「お話し」をもとに作られたと推測できるが、テキストの形にまとめられたのはウル第三王朝時代から古巴ビロニア時代初期であろう。「恋愛歌」「相聞歌」の形をとることが多く、宗教儀式との関わりは必ずしも明確ではない。
- 3) 一方、問題の時期すなわちおよそ前 2100－1800 年に実在した「シュメールの王」とイナンナの結婚の様子を叙述した、或いはこのカップルの間で交わされた言葉を詩歌にしたテキストがある。こちらの方が作品の点数も多い。結婚儀礼で「シュメールの王」は伝説上有名なイナンナの愛人ドゥムジの役を演じているが、神ではなくあくまでも人間である。ただし、王にある種の「神格化」が行われてた時期ではある。
- 4) 3) のテキストの場合、イナンナは結婚の儀式を通じて、相手の「王」と王が治める国を祝福している。
- 5) ところで「イナンナ女神の愛と結婚」とは全く別に、ラガシュの守護神ニンギルスとその妻バウの「婚礼式」に言及したテキストが若干存在する。これは有力な男神とその妻である女神の結婚儀礼であり、「神と神の婚礼」である。テキストはラガシュをグデア王が治めていた前 2120 年頃に成立している。つまり、イナンナ関係のテキストより、短く見積って約 30 年、

長く見積もって約 300 年早い成立となる。

以上の事柄から気付くのは、まずはシュメールの「恋愛宗教劇」にはイナンナをヒロインとしたいいわゆるイナンナ型と、ラガシュ型の二つのタイプが存在することである。前者は女神と王（＝人）との結婚で、後者は神と神との結婚である。さらにイナンナ型のなかにも、イナンナを恋する娘として描く 2) のタイプと、イナンナを愛人 / 夫よりはるかに高位の大女神的存在として描く 3) のタイプがあることも明瞭に浮かび上がってくる。

シュメールの「神の婚礼」問題は、一見単純そうで実はそうではない。私自身、これまでイナンナ型とラガシュ型との差異にばかり気を取られていた。そして、ラガシュ型を前一千年紀の事例に通じる、遠い先駆けと位置づけてきた。こうすることで、前一千年紀の事例をメソポタミアにおける「神の婚礼」儀式の流れの中に位置づけることに成功したと考えた。それについては現在も考えは変わらない。しかしイナンナ型に二つの流れがあるとすれば、事柄は一層複合的になってくる。

この面をさらに追及するのが、今後の課題となろう。そのためにはもう少し時間が必要になる。

IV おわりに

今回、バビロニア・アッシリアにおける「神の婚礼式」を要点のみ概観した後、シュメール世界の「宗教恋愛劇」をいくつかのタイプに分類してみた。それぞれの世界の「神の婚礼 / 宗教恋愛劇」の間の繋がり・関わりをどう考えるか、これこそが問題であり、事実様々な議論がある。繋がり・関わりの有無も含め、論争が重ねられてきたにしては、一向に結論が見えてこない。

問題の解明にむけて展望を開くことを願って、一つの視点を提案したい。それは、恋愛 / 婚礼の当事者である男女の間の、地位と力の差異である。これまでの記述でもわかるように、この婚礼劇には、国の王が直接間接に関与している。国家にとっては重要な政治宗教儀礼の一つである。シュメールの場合は、国の王が有力女神イナンナと恋愛劇 / 婚礼劇を繰り広げた。その結果を国が享受した。バビロニア・アッシリアの場合には、男女神の婚礼式の遂行に王が様々

な寄与をした。ところで今回明らかになったように、シュメール世界の中でも、ヒロインのイナンナは若い娘から偉大な女神へと姿を変えている。イナンナ（バビロニア・アッシリア世界ではイシュタル）は、実に複雑な性格を有する女神である。この女神を論じるに、数多くの研究者が今後もなお検討を重ねることとなる⁽⁹⁾。

メソポタミア世界は、一般には古代の、男尊女卑の風潮が強い世界と捉えられている。女神は、イナンナ/イシュタルを例外として、通常は有力な男神の妃として登場する。つまり夫に対しての妻であり、その地位や力は夫に勝ることはない。その背後には人間社会の実態がある。だが、IIIで見たように、イナンナ自体についても、その像は変化している。女神の役割をより細かく分析し、より深く追求することを通じ、この宗教婚礼式の性格が浮かび上がり、政治宗教儀礼としての位置が鮮明になるのではないだろうか、そのことによって、古代世界の新たな一面が見えてくるのではないか、これが現在の私が抱いている、将来に向けての展望である。

[注]

- (1) ここ十年余の間にフィンランドに拠点を置く研究者たちから出されてきた議論、とりわけ次の三点である。

- 1) Nissinen, Martti, AOAT 250 (Münster 1998), pp.583–634.
- 2) Nissinen, Martti, *Melammu Symposia II. Mythology and Mythologies* (Helsinki 2001), pp.93–136.
- 3) Lapinkivi, Pirjo, *The Sumerian Sacred Marriage in the Light of Comparative Evidence*, SAAS vol. XV (Helsinki, 2004) .

これらは精緻な資料検討をもとにした力作であるが、ただ、北欧のキリスト教的発想法にあまりに大きな影響を受けている点が、私にはいささか気になる。特に3)に顕著である。

- (2) この点については、拙著『メソポタミアの神像』－偶像と神殿祭儀（角川書店、2001年）のなかである程度こだわって論述した。特に結論部にあたる「終章」（pp. 224–230）で強調した。
- (3) これについてはかつて私自身、欧文・和文双方でいくつかの論文発表を行った。次の論文に詳細を述べている。E. Matsushima, 《Le ‘Lit’ de

- Šamaš et le rituel de mariage à l' Ebabbar.》 *ASJ* 7 (1985), pp. 129–37 ; E. M., 《 Le rituel hiérogamique de Nabû. 》 *ASJ* 9 (1987), pp. 131–75 ; E. M., 《Les rituels du mariage divin dans les documents akkadiens. 》 *ASJ* 10 (1988), pp.95–128. 和文論文については、次の拙著の該当部分に詳細を記している。松島英子、『メソポタミアの神像』－偶像と神殿祭儀、角川書店、2001年、第五章、2、特別行事、pp.190–221.
- (4) W.G.Lambert, *MIO* 12 (1966) pp.41–51.
 - (5) メソポタミアの文学作品は、その最初に一行を「題名」とした。
 - (6) 当時の暦で一年の二番目の月。
 - (7) S. N. Kramer, *The Sacread Marriage Rite. Aspect of Faith, Myth, and Ritual in Ancient Sumer*, Bloomington and London, Indiana University Press, 1969.
 - (8) 本稿注 1、3) 参照。
 - (9) この大問題をテーマとして、2011年8月24–25日に慶応大学において国際学会 (International Conference on Ishtar / Astarte / Aphrodite: Transformation of a Goddess) が開催され、私も研究発表者の一人として参加した。その成果は、論文集として近く出版される予定である。

ABSTRACT

A New Approach to the Divine Love Ceremonies in Ancient Mesopotamia

Eiko MATSUSHIMA

The problem of the divine love ceremonies in Ancient Mesopotamia has attracted since more than a half century the specialists of Mesopotamian history. Many discussions have been presented until now. I myself once studied intensively on this subject, especially on the divine love ceremonies in the first millenium BCE in Babylonia and in Assyria. Since a while, because of new papers published by Helsinki school assyriologists, I have been interested once more in this problem and decided to reexamine these ceremonies, in order to clarify the exact characteristics of the religious phenomena.

This paper is somehow the part 2 of my recent short paper, “A proposal essay on the divine marriage in Mesopotamia”, in C. Shinoda (ed.) , *Mythologies, Symbols, Languages*, part III (Rakuro-shoin, Nagoya, 2010), pp.121–132. I did not clearly notice in that paper the differences among the Sumerian Love Texts, dated between the end of third millenium to the beginning of the second millenium. After a detailed analyse of so called Inanna Cycle texts, I found the fact that there are two types of Inanna : young pretty girl full of love passion and a great goddess of Uruk who grants a good fate and prosperity to the king of Sumer, her “lover”. With this newly found fact, we may discover other aspects of the goddess Inanna, who has in fact an extremely complex character. Then, I hope, a new approach may be developed to these interesting but very complicated subject.